

## 第27回NIE全国大会（宮崎大会）レポート

～いまを開き 未来を拓く NIE

### 1：はじめに～2年ぶりの対面形式、全国の仲間との出会いは、NIEの未来を大いに拓いてくれた2日間

これまで報告者は、2度のNIE全国大会（札幌・東京）に参加した。もちろん、2大会とも新しいNIEの知見を得ることができた素晴らしい大会であった。しかし、対面形式における今大会は、これまで以上の格別な体験ができた実感している。やはり全国各地の仲間から発信される「生の声・現場での実践」は、新聞に向かう真剣な眼差し、知識を得る充実した生徒の姿、そして全ての人の息づかいを聞くことができ、その後の実践にイメージを持ちながら取り組むことができる自信を与えてくれた。



さて、今回の報告は、現場で報告者が直接見聞きしたものをレポートしている。報告者が見学したもの以外については、NIEのホームページや他者の報告書から情報を得ていただきたいと思う。内容が限定されている分、これまでほどの紹介とはならないが、その代わりに、現地で活動されている仲間たち、生徒たちの様子、息づかいを写真とともに記録した。少しでも多くの内容が伝われば幸いである。

### 2：NIE全国大会 公開授業報告

#### （1）宮崎県立宮崎大宮高等学校「新聞スクラップの活用～汎用性のある発展を目指して～」（公開授業）

##### （授業概要）

新聞スクラップ記事を教材として、生徒の時事問題に対する興味関心、調べた内容をどのように自らのミライ（＝本実践での表記：報告者注）に活かしていくか。本授業では、新聞記事から生徒たちのディベート活動を通して、共同で問題解決に向かう力を育成する実践として紹介された。

授業を行った宮崎大宮高校は、県下でも有数の進学校である。多くの生徒が県内外の大学を目指し、目標とする進路先も高い位置にある。自らの進路を実現するためにも、将来の進路に直結したものを時事から探求する意識を1年時から高めているという。次世代を担う人材として、これから解決策を見出すべきもの、あるいは現時点では答えの見いだせない難問に挑戦し、今後の学習課題のモチベーションにしていくテーマを果敢に挑戦していた姿が印象的であった。

##### （授業の流れ）

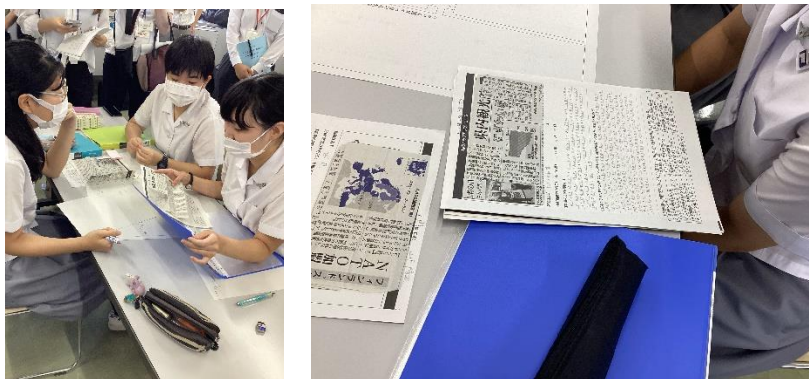


##### ①本授業の説明（5分）

実践教員より、授業の進め方について生徒（見学者）に説明。授業に参加した生徒たちは、1学年の頃より、新聞スクラップを収集し、要約や意見文をまとめる活動を行っている。また、この活動は、教科内に位置づいたものではなく、自主的な進路学習として、HR活動の中で行っている取り組みであると紹介された。

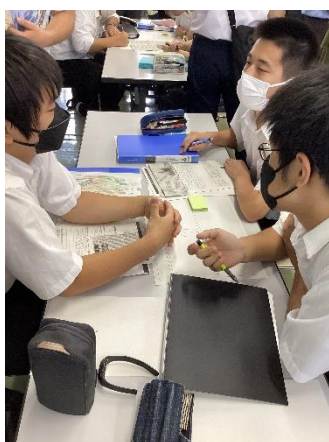
## ②各自で選んだ記事をプレゼンテーション（1人3分目安）

3～4人1組となったグループで、各生徒が持ち寄った記事の紹介を行う。プレゼンテーションでは、1) 記事を選んだ理由、2) 記事の注目点、3) 記事の概要などを説明する。今回、生徒たちが収集していた記事は、「子どもの貧困問題」・「少年犯罪の実名報道」・「ユニバーサルデザインの提案」・「ウクライナ問題」など今日注目されている問題や、地域にまつわる話題が多くあった。



## ③持ち寄った記事から、ミライにつなげるディベートを行う（20分）

プレゼンテーション後、各グループで気になった記事を1つ選択し、自らの将来（ミライ）



に向けた問題解決学習を行った。ここで「課題解決のために、ICT機器の使用を行わない」という点が授業のポイントとして重視されていた。「スマホやタブレットをなぜ使ってはいけないか？それは、ICT機器にすべて答えが載っているから…答えが全て載っているということは、調べることに専念してしまう。そうすると、会話がなくなり、ディベートの意味がなくなる。だから、自分たちの力で考えよう（実践教員より）。」

さらに、「ディベートの基本は、他者と話して『考えること』である。調べるモノがない、制約がある中で、個人で考え、そして皆で協力し合って1つの答えを考えだすことが、これから主権者として生き抜く皆さんに必要なことでないか…を理解し

てほしい（実践教員より）」

まるで、対話と問答を繰り返し、各自の無知を自覚しながら新たなる知を生み出そうとする現代版ソクラテスのあり方を体現していたような実践であった。

## ④ミライの実現にむけた取り組みをまとめる（20分）

③の対話を進めた後、ミライの実現に向けた各グループの意見をまとめていく。実際に話し合われた事例を紹介する。

（子どもの貧困問題を取り上げたグループ）

**Q：子どもの貧困をなくすためのミライをどのように考えるべきか**

生徒1：「貧困をなくすためには、やはり食糧確保が必要。協力者を募るべき。」

生徒2：「そもそも子どもが貧困になる原因は、保護者である親の労働環境が悪いから発生

しているのでは。親の労働環境を改善することを国・企業に訴えるべきでは。」

**生徒3**：「国という意見が出てきたが、国の税金の使い方を見直していく必要もある。税金は公共のために使われるものである。困っている子どもがいるのであれば、子どものために使う仕組みを具体的に考えよう。」

**生徒1**：「では、税金を使って農家に子どもの貧困の趣旨を伝え、食料提供を呼び掛けては。保証価格を提示して、生産物の5割くらいを提供してもらえよう働きかけてみてはどうだろう。」

以上のように、生徒たちは自らが持ちうる知識、とりわけ高校の公民で習う税金制度や社会福祉、農業政策の一端を引用しながら、現在の自分たちが持てる知識を活用する意識が見られた。

(実践を終えて)

本授業を受けた生徒たちの新聞購読率は5割程度だと紹介された。そのため記事の選択について、学校や教師からの新聞提供で取り組んでいる生徒も多くいる。生徒も当初は授業(教育的)一貫であることを前提に授業を受けていたため、強制感は否めなかったという。自主的に新聞を購入し、手に取る意識が高まる手法を考えなければならないと、実践者より話があがった。

一方で、スクラップ記事の活動を行う意義を実践しながら理解させたことにより、徐々にではあるが、活動自体は主体的なものへと転換できたと報告された。今後の生徒の広がりや他校での汎用が可能かどうかについては、実践者より、幅広く活用できると力強く発言された。各校の特色や求めるニーズ、そして学ぶ意義を明確にすることにより、誰でも気軽且つ充実した活動になると思われる。

## **(2)宮崎県立都城さくら聴覚支援学校「日本語を身に付け、自分の意志を表現できるようになるために～新聞を用いた実践～」(実践報告)**

(発表概要)

現代社会における価値観の多様性やあらゆる障がい、個々人の特性に対し、それぞれのニーズに合う教育開発は、どの分野でも早急に求められるものである。宮崎県立都城さくら聴覚支援学校では、聴覚に何らかの障がいをもつ生徒たちが必要とする「言語を読む力(読解力)や聴く力(\*発表校に在籍する生徒には、障がいが軽度から重度の者と幅広い。よって、一部聞こえるが、他者の発音を読み取れないため、意志疎通が難しい者もいる。また後述するが、年齢層も幼稚園児から高校生までと多様な年齢層がいる。)」を新聞活用から育んでいく取り組みが紹介された。



(具体的な取り組み)



本実践発表では、聴覚に障がいをもつ幼稚部から高等部までを対象とした言語活動、文章作成活動の取り組みが紹介された。聴覚障がいを持つ子どもたちが、最も時間をかけて学ぶ必要がある項目は、1) 語彙力、2) 助詞、3) 音韻であるという。なぜなら手話と書き言葉(=書記日本語という)では、文法体系が異なるためである。とりわけ、一部聞き取りの可能な児童生徒にとって、書記日本語の習得には、教科書以外の文章から、豊富に言葉

の違いや豊富な語彙が学べる新聞は有効な教材になるとのことであった。以下、幼稚部から高等部、寄宿舎までの取り組みを簡単に紹介する。

### ①幼稚部での取り組み

言語の基礎、また言葉の面白さや事物と言葉の組み合わせを理解させるため、新聞内の「写真や図、イラスト」を用いて、語彙力を増やす取り組みを実践。最初は、教師から提供し、言葉を学ぶスタイルを取るが、徐々に、子どもたちから興味関心がある事物を選択させ、語彙を増やす活動を行っていく。幼稚部に限らず、「写真・図・イラスト」等の可視化されたものは、言語取得に大いに役立つという。その際、新聞社の方々へ、絵文字やピクトグラムのようなものを多く入れていただくことを要望されていた。

### ②小学部での取り組み

「視写」を中心として、『朝日小学生新聞』内の「天声こども語」を活用した取り組みが紹介された。視写後は、分からない言葉を、国語辞典や教科書の単元等を通して学びを深めていく。理解が深まると、記事の要約活動まで発展させ、学びを充実させていた。

### ③中学部での取り組み

聴覚障害の生徒の課題となる、助詞の活用や文型を中心とした学習法が紹介された。具体的には、新聞記事から文型に応じた文章を探し、助詞の意味を理解する取り組みであった。わからない言葉は、小学部同様、調べ学習を取り入れて学習を進めていく。また、朝・帰りの会の時間を活用し、時事ニュースを取り上げ、生徒で考えさせる活動も導入している。調べ考えことは、ワークシートにまとめ、教室内に掲示し、全員で情報共有する工夫を行っていた。

### ④高等部での取り組み

生徒の主体性をもって記事を選定する活動を実施。他者に記事を紹介するための方法として5W1Hに沿って内容を説明することもチャレンジした。紹介後は、感想文を作成し、内容のフィードバックや学んだことを各自でアウトプットし理解を深めることを取り組んでいた。

## ⑤ 寄宿舎での取り組み

実践校に寄宿している生徒についても日々の課題学習として、新聞活動を取り入れている。新聞記事の一部を隠し、その内容が書かれている文章を見つけ出すといった活動や、生徒たちの興味関心が出る記事を用意し、時事力を深めていく活動が取り入れられていた。

### (実践報告を受けて)

個々のニーズに応じた教育活動は、障がいの有無を問わず、各教育分野で考えていかなければならない課題である。そのため自らの所属する校種のニーズのみを考え、教材開発に臨んでも、見落とす課題や小さな問題点が発生する可能性があるのではないか。そのように考え、報告者は、制約やハンデを持つ児童生徒の教育活動を見聞し、一定の知識を見出すべきと考え、本実践報告を聴かせていただいた。

さて、そんな今回の実践報告で、実践者から提案された言葉で印象深いものがあつたので筆記しておく。

「障がいを持つ子どもたちに、できるだけ『ルビ』をふってほしいなと思います。聴者の場合は、難しい漢字が出て、言葉を通して、言い換えながら表現をすることで理解が深まります。しかし、子どもたちは、手話と文字でしか理解をする方法がありません。理解を導く助けが少しでも多いと、それだけ子どもたちの学ぶ楽しみが増えていきます。

特に、助詞には『絵文字』を付してもらおうと助かります。文章内で助詞を教えることは、最も難しいのです。聴者のように当たり前に、発音、イントネーションが理解できれば、困ることではありません。しかし、聞こえない子どもたちに対峙すると、その当たり前ができません。障がいと向き合っているからこそ必要な優しさに気づけることがたくさんあります。NIEを通して、積極的に社会に知っていただけると助かります。」

教育には、万人に共通な方法があるわけではない。しかし、つつい私たちは、これくらいできるだろう…という思い込みの下、教育活動を行ってしまう感がある。未だ制約の多い教育現場である。特別支援での努力に耳を傾け、この活動を他校種でも応用していくことがさらなる教育の発展につながると思われる。

報告者 為重 慎一 先生 (広島国際学院中学校・高等学校)